

MH精工 株式会社

少量多品種生産に強み
M & Aを契機に事業拡大ねらう事業
内容グループ会社で
少量多品種の製品展開を

「MH精工」は、「森川金属」として昭和59年に大阪府東大阪市で創業した。後継者不足を契機に、平成26年6月に東大阪市内に本社を持つ(株)ハヤシセーラが買収して子会社化した。共通の取引先である阿波銀行の紹介により、M & Aが実現した。創業当初に取引関係があり、「近くて歩いて行ける距離というのも買収の決め手だった」と現在、(株)ハヤシセーラの社長を兼務する林秀樹社長は話す。(株)ハヤシセーラによる買収後、「MH精工」に社名を変更した。

(株)ハヤシセーラは家電や自動車向けの大ロットの仕事が多く、少量多品種のビジネスに対応したいとの思いがあった。一方の旧森川金属は、月産50〜500個の小・中ロットの生産が多かった。(株)ハヤシセーラは、買収した旧森川金属がグループ会社化することで従来手薄だった少量多品種の製品展開を補完できると判断し、改善活動などを通じて会社力の向上に努め、両社の協力関係を深めている。

補助
事業高圧クーラント旋盤と
ポリゴン加工機導入

「MH精工」は、旧森川金属時代の平成25年に高圧クーラントを装着した旋盤を導入した。これは、切削性能が向上した旋盤で、中小企業庁の「ものづくり補助金」の採択を受けて導入したものである。タイヤメーカーの製造ラインに使用するバルブ部品の生産をする上で、品質向上とコスト低減が求められていた。切削工程で排出した切り粉で刃を痛めることを抑えるため、高圧クーラントでの加工が必要だった。

さらに「MH精工」となっても、[ものづくり補助金]を活用。計1,860万円を投じて、マシニングセンターと加工対象物を多角形に切削するポリゴン加工機の計2台を導入した。建築現場の高所作業向け安全ブロック「ガイドスクリュー」の需要が高まっており、ポリゴン加工機は、刀具と加工対象物を同時に回転させながら切削する。従来の工作機で急激な需要増に対応できないため、新設備の導入に踏み切った。ガイドスクリュー以外の製品も多数加工しているが、ポリゴン加工機の使用目的のウェイトを大きく占めているのはガイドスクリューとなっている。

MH精工 株式会社

代表取締役社長 林 秀樹

〒578-0903 大阪府東大阪市今米2-1-26

TEL. 072-962-8752

FAX. 072-962-8753

資本金/12,000千円

従業員/15名

 短納期
小ロット
OK
量産
OK
試作
OK
連携力

グループ会社一丸で新しい提案を

代表取締役社長 林 秀樹

平成26年に(株)ハヤシセーラのM & Aにより「森川金属」が、「MH精工」に変わりました。グループ会社一丸となってタイムリーな対応をし、新しい製品やシステムを提案していきます。



建設作業者が使用する墜落防止装置の主要部品



前加工をしたガイドスクリューをMC治具にセットした加工前の状態



加工終了後

具体的
成果設備投資によりバルブ部品の
売り上げが3倍に増加

平成25年度の高圧クーラント旋盤の導入は、バルブ部品の売り上げ面で大きく貢献した。導入前の平成24年9月から平成25年8月までの売上高は497万円。平成27年5月〜平成28年4月には、約3倍の1,278万円に売り上げが増加した。取引先が増えたことがけん引したという。刃具の交換が従来の20本に1回から、40本〜50本に1回となるなど工具寿命も延びていった。

この実績をもとに、さらに補助金を活用してポリゴン加工機を導入。平成32年(以下、2020年と表記)東京オリンピック・パラリンピックの開催にあわせ、建築関連の受注が大きく出るとみて導入した。加工時間が従来の2分から、半分となる1分になったという。ポリゴン加工機の導入による売り上げの貢献度についてまだ分析を終えていないが、確かな手応えを感じている。「他社に委託している仕事も“MH精工”に、という取引先の声をいただいている」と林社長は話す。ただ、この売り上げ増加という結果に甘えていない。「高圧クーラントはどういった使い方をすれば効果的なのかを突き詰めて考えたい」と林社長は意欲を見せている。

今後の
戦略2020年の
東京オリンピックの需要期待

「2020年に3億円の売上高を目指している」と林秀樹社長は目標をこう切り出す。2020年は東京オリンピック・パラリンピックの開催年。高圧クーラント旋盤やポリゴン加工機の導入で、この数年で建築現場向けの資材を急ピッチで強化してきた。2020年を前に、建築ラッシュにより需要が高まっていくとして市場の開拓を急ぐねらいがある。

「MH精工」が設備投資を急激に進めたのと同様に、親会社の(株)ハヤシセーラでは従来より高精度な転造加工に挑戦するのが目的で、ロートフロー式転造盤を増設した。従来取引がなかった業界に積極的に売り込もうとしている。「MH精工」が多品種小ロット、(株)ハヤシセーラが量産品と異なる分野をこれまで攻めてきた。それに加えて製品のサイズでも対応する幅も違う。(株)ハヤシセーラは直径25mm、一方「MH精工」は直径40mm〜50mmで生産している。林社長は、「“MH精工”の社員は金属加工に造詣が深くチャレンジ精神も旺盛である」と自社の強みを語る。その社員らと一体となって自社が保有する設備の良さを最大限に引き出し、新たな製品や技術を生み出していく。

取材を終えて

業態が似ているように
見えるものの

「MH精工」と(株)ハヤシセーラという一見、同じ業態のような会社がグループ化した。業態が似ているものと思い込んでいたため、統合効果があるのだろうか疑問がわいた。ただ、取材を通じてそれは覆された。今後も、異なった製品群で勝負するという。それは導入する設備にも違いが出ているので明らか。ただ、顧客にとって違う製品や技術を持っている企業グループの存在は、多様な仕事を任せられる点でありたいと思われる。

<http://www.mh-seiko.com/>